

花澤哲文 提出 学位申請論文（課程博士）

『高山樗牛研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、日本の近代文学の展開期、すなわち一八九〇年前後から一九〇〇年代前半にかけて活躍した高山樗牛の文壇登場作『滝口入道』、およびそれをめぐって樗牛と坪内逍遙との間に生じた「歴史劇論争」をとりあげ、その文学史的・文化史的意義を考究することを主な内容とする。

『滝口入道』は一八九四年（明治二十七年）、高山林次郎（樗牛）が東京帝国大学文科大学哲学科一年在学中、『読売新聞』の「歴史小説・歴史脚本」懸賞募集に応募し、「優等」（ただし二等）に選ばれた作品で、同年四月十六日から五月三

十日まで三十三回にわたって同紙に連載された。樗牛は匿名で応募し、連載中も作者名を公にすることをしなかった。

『滝口入道』は「恋愛」「武士道」「出家」などのテーマと、「美文」と言われる文体（叙述法）とがあいまって同時代文学の代表作としてもはやされた。同時に、樗牛は雑誌『帝国文学』や総合雑誌『太陽』（文芸欄主筆）を中心に文芸・美術・哲学・歴史学・倫理学・論理学・文明論・宗教論など、多岐にわたり、旺盛に筆を執り、文壇・論壇に大きな影響を及ぼした。

しかし、一九三〇年前後の「昭和モダニズム」の時代に樗牛熱は急速に薄れた。その要因として論者は「樗牛特有の美意識に裏打ちされたロマンティズムと、それを表現した『美文』のスタイルが大きく関係している」とし、逆に樗牛文学（小説・評論）に「内在」した「可能性」をさぐるものが日本文学史・文化史・精神史を解明する有力な手がかりになると提言する（序章「はじめに」）。

樗牛研究は現在までまとまったものが少ない。その要因は樗牛が生前「豹変博

士」と異名をとるほど思想的に多様、多彩で、飛躍も多く、前記のように評論を多作したことにある。論者はこうした研究状況を踏まえながら、以下の各章のよう
に研究を進める。

はじめに

(二頁～二頁 一頁〓六十三字×二十三行)

第一章 『滝口入道』論

(三頁～七十一頁)

第二章 『滝口入道』のエクリチュール

(七十二頁～百四十頁)

第三章 歴史劇論争(樗牛と逍遙)

(百四十一頁～百七十七頁)

おわりに

(百七十八頁～百八十一頁 計四百字換算六百五十五枚)

第一章では、『滝口入道』について作者の側からの「評釈」を目的に論を展開する。

まず、樗牛の「美文」がすでに福島中学校在学中の日記『光陰誌行』(十四歳)や創作『春日芳草之夢』(十五歳)に窺え、それらが漢詩の影響によることを明らかにする。また、『滝口入道』の登場人物斎藤時頼の、みやびを誇る平家の公

達に対する反俗的な精神（武士的心情）や横笛との恋（恋愛感情）などが、北村透谷「厭世詩家と女性」に見られる近代的な恋愛観や美意識に通じることを実証する。このようにして透谷の理論の中核である「想世界」と「実世界」との対立を「悟りの美意識」へと昇華させた作品として『滝口入道』を位置づける。

さらに、仙台の第二高等学校時代にゲーテの『若きウエルテルの悩み』の抄訳『准亭郎（エルテル）の悲哀』（『山形日報』に掲載）と『滝口入道』とを比較分析し、エルテル准亭郎の自殺への経緯が『滝口入道』に影を落とし、『平家物語』や『太平記』を典拠にしながらも、それらとは異なる展開・結末を可能にしたことを明らかにする。

第二章では、ロラン・バルトのエクリチュール（書く行為）理論を取り入れて『滝口入道』の物語構造を分析し、樗牛の文体が一続きの章句の中に語り手と登場人物の主観が交錯し、流動する、柔軟で重層的な構造を持つ「美文」であることを論証する。その上で、樗牛の文体は日本の近代文学が生成する過程で見失っ

た「可能性」であり、現代文学の「可能性」をも再考するヒントとなると提言する。

次に、『滝口入道』研究史上、「最高の精度を持った労作」でありながら、ほとんど省みられずに埋もれてしまったとする、後藤丹治の業績を取り上げて検証する。

後藤丹治は『滝口入道』の典拠を、『平家物語』、『太平記』、『南総里見八犬伝』（曲亭馬琴）をはじめ、樗牛が見ることが可能で、しかも影響を受けたと想定される近松門左衛門、同時代作家の尾崎紅葉、幸田露伴、通俗小説作家村上浪六などの多数の作品を調査し、その影響関係を論述した。論者は後藤のあげるそれらの作品と『滝口入道』とを細部にわたって比較検討し、その見解の合理・非合理（妥当性と「牽強付会」性）を明らかにする。言わば近代文学研究者が見逃していた後藤丹治の業績を洗い直す作業を行う。

第三章では、『滝口入道』をきっかけとして坪内逍遙と樗牛の間に起こされた

「歴史劇論争」を整理し、その意味づけを試みる。『読売新聞』の文学主任で「歴史小説・歴史脚本」懸賞の審査員でもあった坪内逍遙は、「歴史劇」は「史」（史的事実）の再現でなければならず、『滝口入道』は「今様の空想」だとして批判した（「歴史小説の尊厳」）。これに対し、樗牛は「歴史戯曲」とは「詩」としての「有機体」であり、その主人公は「悲劇的勇者」でなければならぬと反論した。

論者はこの論争の経緯を振り返り、逍遙の方に樗牛説に対して「詩」と「史」の折衷案が用意されていたことを推定するが、論争は中絶する。その背後に樗牛の側に、日清・日露戦争に挟まれた明治中期、日本のあるべき方向をさぐる国家主義・日本主義の主張、さらにニーチェの個人主義・天才主義の鼓吹など、文明批評へと重点を移したことが介在したと結論づける。

論文審査の結果の要旨

本論文「第一章」は、高山樗牛の文壇登場作『滝口入道』を中心に、先行研究や資料を博搜し、それに基づいてその生成過程、時代背景、作品構造を解明することを試みたもので、多くの新見が出されている。

なかでも樗牛の思想的立場を「個人主義」とする従来説を「歴史的変遷による多義的解釈」であるとしてしりぞけ、「樗牛の内省と美意識の葛藤から形成される」「個我主義」と命名し、そこから、時頼の帯びる「鉄くろがね卷の丸鞘」を「武」、美しい女性の介在による「摺すりざめ鮫の鞘卷」（細鞘）を「恋」、「墨染の衣」を「悟」、「練布ねりぎぬの白衣」を「還俗」の、それぞれ喩であることを指摘し、「武」から「恋」、 「恋」から「悟」（出家）、「悟」から再び「武」（還俗）・「自死」へと自己を自在に変容させる物語として解釈する。さらにそうした自由さを支える「個我主義」により、日清戦争開戦直前の国家主義意識を超越した「歴史に伏在している意識」

を抽出し、造形した作品ととらえ直す。

その他、個々の読みを深めたところは随所にある。一例を示せば、往生院に横笛が滝口入道（時頼の出家名）を訪ねる場面で「恋の美意識」（横笛）と「悟の美意識」（入道）との対立に「振鈴の響」（「振鈴の響」は高野山の場面ほかに現出）が介在するという例をあげ、作中で「音」が基調低音のように鳴り響くという指摘である。

本論の優れた点は、作品の書かれた時代状況と読みとを関連させ、作品を時代の中のへ生き物として有機的にとらえ直したところにあり、評価に値する。ただし、「個我」の意識に関して、論者は先行研究を一部引用しながら、北村透谷の評論「厭世詩家と女性」に見出される「想世界」・「実世界」の概念を援用するが、その問題は透谷研究の中核としてすでに多くの研究があり、論争も行われている。こうした研究史を踏まえたより複合的な立論が必要ではなかったか。

第二章では、『滝口入道』の物語構造の分析を緻密に行い、『滝口入道』の「美

「美文」体の特徴を、時頼の「心情がへ直接表現（話法）であらわされ」たり、「突如としてへ主観的主観」に切り替わつたり、彼の主観とともに「メタ視点を孕んで」いたりするといった「非合理的な重層性」を持ち、それが「物語構造を複雑化させる」とともに「読み手側の（想像の）可能性を広げている」と評価する。

このような「美文」体の盛行は日露戦争前までで、以後急速に衰退し、「散文」体小説へと移行する。論者は日本の近代小説が「美文」の可能性を放棄することによって簡潔」となり、「広範な読者層を得てきた」反面、「美文」の持つ「可能性」、言い換えれば自在な文体とそこに社会・国家と対峙する「個我」の独自性を表現する機能を損ねることになったという。そこから論者は「美文」を見直し、再評価することを提言する。この提言は、衰退期と言われる現在の文学界、また文学史研究の不毛な現在の学界に対する発言として傾聴に値する。難を言えば、「美文」、「物語構造」の定義を、当時の他の作家の作品、あるいは謡曲・狂言・歌舞伎などの古典との関係を含めた広い視野から行えば、より説得力を増し

たはずである。

次に、近代文学研究者が看過してきた典拠考に関する後藤丹治の業績を丹念に掘り起こし、その適否を慎重に吟味し、学的価値を判定しようとしたことは特筆されていい。なかでも、後藤が指摘する村上浪六の『三日月』、『奴の小万』、『深見笠』などの撥鬢小説や探偵小説との影響関係は、これまで誰も触れてこようとしなかったことである。一例を挙げれば、横笛の室内の様子、「側がたへにある衣桁いかうには紅梅萌黄の三衣えを打懸けて、焚き籠めし移り香に（中略）柱には一面の古鏡こきやうを掛けて、故わざとならぬ女の魂たましひ見えて床し」（『第十五』）が『奴の小万』の「衣桁には源氏香を染め抜きし勤仕つとめの衣服うちかけて（中略）幾折か重ねたる白紙の上、わざとならず赤地の錦もて包める懐剣を載せたるは、女ながら武家奉公のたしなみ（以下略）」について、論者が指摘するように類似は明らかである。しかし、論者は室に入ってくるのが老女の冷泉である（『滝口入道』）のに対し、「女たらしの美男」寛であること（『奴の小万』）をもって後藤の指摘が物語構造とはかか

わからないことを糾す。

このように、資料の博搜とともにその学的価値を判定することは、実証的な研究として意味がある。ただ、典拠という個々の事例だけでなく、それら（典拠作品）が『滝口入道』の中にどのように編み込まれ、作品がいかに生成されたかを総合的にとらえる理論化が必要であつたろう。その点、今後の課題として残される。

第三章は、「歴史劇論争」を整理し、先行論を批判的に継承しながらその意味づけを行い、文学史的な側面に照明を当てた点が評価される。たしかに、「歴史劇論争」の経緯とその内容は論者が指摘するとおり、「史」と「詩」の対立であり、この問題をめぐっての逍遙の折衷案を探り当てたのは新見と言える。

文学史の上から見ると、「歴史文学」をめぐる問題は、その後森鷗外の「歴史其儘と歴史離れ」（一九一五）、戦後における大岡昇平と井上靖の『蒼き狼』論争」（一九六一）など、文学と歴史・社会・文化とのかかわりをめぐる重要課題

である。今後の論者の研究課題としては、大局的な立場から「歴史文学」について考察を進め、近代文学の全体像（文学史）を解明することが望まれる。

以上、評価とともに課題を指摘してきた。樗牛文学の難解さはとりもなおさず、樗牛が文学に限らず、日清戦争から日露戦争へと至る間の日本の直面した国家・国民・社会・文化における諸問題を諸手で抱え込み、それら輻輳する諸問題を筆によつて表象しようとしたことに起因する。そうした型破りの大作家の総体をとらえることの難しさは、いまさら言うまでもない。論者の研究者としての資質と精進とによつて、近い将来それが克服されることを期待する。

付言すれば、基本的な問題として『滝口入道』の本文・テキストは初出『読売新聞』連載稿、作者生前刊行の春陽堂版稿、死後姉崎嘲風の手入れによる全集版稿その他があるが、いずれも誤字・脱字・ルビの異同・改稿など問題が多く、決定稿ではない。所在は明確でないが、作者の手書き原稿が残されていると聞く。それらを含めてテキスト・クリティークをいっそう進めることも大切な作業であ

る。

論者は岡山大学大学院文化科学研究科社会文化基礎学博士課程前期修了を経て、平成十九年、本学文学研究科日本文学専攻博士課程後期に進学し、進学後、修士論文をもとに単著『高坂正顕―「京都学派」と「歴史哲学」』（燈影社、平成二十年八月）を上梓した。これについては千田義光教授の書評（『國學院雑誌』平成二十一年三月、巻号略）がすでにある。その他、「成島柳北『柳橋新誌』における内的機制の考察」（『國學院雑誌』平成二十一年七月、同論により國學院雑誌学生懸賞論文入選）、「小林秀雄における「問い」の行程」（『國學院雑誌』平成二十二年七月）のほか、國學院大學國文学会秋季大会（平成二十一年十一月八日）口頭発表、その他があり、研究者として今後の活躍が期待できる。よって本論文の提出者花澤哲文君は、博士（文学）の学位を授与されると認定した。

平成二十四年二月十六日

主査 國學院大學大学院客員教授

池内輝雄 印

副査 國學院大學教授

上田正行 印

副査 國學院大學教授

石川則夫 印

副査 國學院大學大学院客員教授

傳馬義澄 印